

ベンジャミン・キーチと非国教徒プリントカルチャー

高野美千代

Benjamin Keach and Nonconformist Print Culture

TAKANO Michiyo

Abstract

Benjamin Keach was a nonconformist writer of the seventeenth century, who published a large number of religious books and articles. But he was among those who have largely been ignored since the eighteenth century. This study aims to make clear that Keach is worth reconsidering as an important author in English literature, by tracing his footsteps as a religious and historical figure and by examining his literary career. He used the prints as a means of publicizing nonconformists' voices, and successfully conveyed his attitudes toward the contemporary religious and political situations to his readers. He was one of the bestselling authors of the late seventeenth century, whose works were read by people of all walks of life. This study concludes that his publications are a good example of the print culture of his day, with special references to one of his major works *The Travels of True Godliness*.

key words: Benjamin Keach, nonconformism, *The Travels of True Godliness*

はじめに

17世紀後期ロンドンの主要書籍商のひとりであったジョン・ダントンは、自身の回顧録 (*Life and Errors of John Dunton*, 1705) の中でつぎのように語る。

He is a Popular Preacher, and (as appears by his awakening Sermons) understands the humour and necessity of his Audience. His practical books have met with a kind reception; and I believe his “War with the Devil” and “Travels of True Godliness,” (of which I printed ten thousand) will sell to the end of time.¹⁾

ここでダントンが言及する「彼」とは、ダントン

自身が出版を手掛けた書物の著者であるベンジャミン・キーチ (Benjamin Keach, 1640-1704) のことである。上の引用はキーチについて述べた一節で、驚くべきは、ダントンがキーチの著書を1万部発行したと言っていることである。キーチの寓意物語 *The Travels of True Godliness* は1683年から1684年にかけて数回の版を重ねている。17世紀後半、当時は1度に発行する印刷物の部数は一般に500～1000と言われており、再版されない書物が殆どである中、1万部を売るに至ったというのは驚くべき現象である。しかも、上掲の一節からは、ダントンはこの作品が後世も売れ続けることを信じている様子がうかがえる。

王政復古期の英国文学では、ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-74) の叙事詩『パラダイス・ロスト』 (*Paradise Lost*, 1667) あるいはジョ

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

ン・バニヤン (John Bunyan, 1628-88) のアレゴリー『天路歷程』 (*Pilgrim's Progress*, 1678) が非国教徒文学を代表するものと言えよう。たとえばこの2作品に関しては、現在においても英文学研究者のみならず幅広い読者層が世界中に存在している。これらの、いわば古典的作品と比較すれば、それ以外の非国教徒文学—その著者、個別の作品—については、長いことその多くがほとんど注目されてこなかったと言ってよい。18世紀以来すっかり看過されてきたのであるが、上記のキーチの例のように、ミルトンやバニヤン以外の非国教徒が著した印刷物の発行部数は、実際には膨大なものであった。そしてそのことは、当然その読者数も多数であったことを意味する。本来ならば英国文学史の一部に数ページを費やして取り上げられても当然ではないかと考える。

1662年の礼拝統一法で国教に従わなかった非国教徒には、長老派、クエイカー、バプテストなど様々な主張を持つものが含まれていた。17世紀末の英国では非国教徒が人口の10パーセントほどを占めていたと言われ、その時代の文化の重要な担い手であったことは否定できない。また、彼らの一部は、出版することによって思想的・宗教的な問いかけを社会に向けて発信する道を選んだ。²⁾ 出版物自体の数が爆発的に増加していった時代、自らの宗教的思想を文字にして広めようという動きである。当然識字率も上がっていた。17世紀末までに、イングランドの識字率は30～50%であったとも言われる。³⁾ 庶民が読み物を手に取り、楽しみ、理解するようになって、書物が大衆生活の中に取り込まれていくといういわば過渡期的な時代であった。

王政復古後の英国でバプテスト教徒として著名な作家には、言うまでもなくジョン・バニヤンがいた。バニヤンはキーチよりも一回りほど年長であった。波乱に満ちた17世紀中期は革命の時代であり、短い期間でも様々な歴史的事件、変動がつぎつぎに起こっていった。バニヤンとキーチのように、年齢が12歳違えば、個人の経験にも非常に大きな相違があったことが推測される。

バニヤンが宗教的論争を開始したのは1650年

代のことであり、相手は主にクエイカーであった。また、バニヤンはバプテストとしての説教活動をして、1660年に投獄されている。釈放されたのは1672年のことであった。1675年には再び逮捕され、半年ほどを獄中で過ごした。聖書に次いで多くの言語に翻訳され読み続けられているという『天路歷程』 (Part Iは1678年、Part IIは1684年に出版) は、バニヤンが獄中で構想を練った作品とされている。

一方のキーチは、15歳でバプテストとなり、18歳で布教活動を始めた。バニヤンが投獄されたちょうどその頃、彼は故郷であるウインズロウの田舎で説教をするようになった。バニヤンが『天路歷程』に代表される宗教的文学作品群の著者として研究されてきた一方で、キーチは、バプテスト教会の「牧師」として言及されることが主であり、宗教的な思想、教会での功績などが注目されている。つまり、非国教徒「著者」としての研究は十分になされてこなかった。

キーチの著作全体についての考察は、決して数多くはなく、貴重な例としては J. B. Vaughn による *Public Worship and Practical Theology in the Work of Benjamin Keach (1640-1704)* (1989年) が挙げられる。⁴⁾ 加えて、Austin Walker の *The Excellent Benjamin Keach* (2004; second ed. 2015) においては伝記的情報も詳しい。ちなみに、日本国内では英文学研究において研究対象になることはほとんどなかった。

本論考においては、王政復古期に注目を浴びていたバプテストのベンジャミン・キーチを対象に、作品執筆の背景の考察と出版物の具体的検討を行う。そして、言論統制に直面しながらもプリント (出版) という手段を用いて世にメッセージを送り続けた非国教徒作家キーチの文学史上の位置づけを試みる。

1. ベンジャミン・キーチと王政復古後の非国教徒文化

ベンジャミン・キーチは英国パティキュラー・バプテスト教会を代表する牧師のひとりであった。⁵⁾ と同時に、キーチは非常に多作な著者であ

り、出版された作品数からは17世紀末から18世紀にかけ英国で大変な人気を博していたことがうかがえる。キーチは40編以上の作品を執筆したとされ、たとえばESTCにはキーチによる出版物179点が記録されている。179というのは、再版を含めた数である。キーチの作品には散文と詩がある。散文には宗教論争的な書物と信仰案内的な書物が含まれる。詩は叙事詩風の宗教的作品や、バプテストとしては異彩の讚美歌集もある。このように彼は多様な種類の作品を発表した著者であった。バプテスト教会においてキーチの名は今も言及されることがあり、その理由は118問から成る教理問答であるバプテストカテキズムが、「キーチのカテキズム」(“Keach’s Catechism”) などとして現在も知られているためである。⁶⁾

キーチはバッキンガムシャのストークハモンドに生まれ、英国国教会において生後間もなく洗礼を受けた。⁷⁾ところが、早い時期にキーチは幼児洗礼について疑問をおぼえるようになった。牧師のマシュー・ミードから影響を受け、自ら聖書を勉強するようになったキーチは、1655年にバプテスマを受けた。そもそもキーチの家庭は裕福ではなかったので、彼は仕立屋の徒弟となったのだが、むしろキーチは聖書の研究に熱心であった。十分な学校教育を受けることはなかったキーチであるが、18歳になってジェネラル・バプテスト教会に入信し、その頃より、教会の仕事に携わるようになっていった。

1660年にキーチはウインズロウ出身のジェイン・グローブと結婚し、バプテスト教会の牧師となった。当時、ジェネラル・バプテスト教徒は地域の中で婚姻を行うのが一般的であり、キーチも例外ではなかった。ウインズロウは17世紀より非国教徒が多い地域であり、キーチが使用したミーティングハウスは現在もその姿をとどめている。⁸⁾ 幸せな結婚生活を始めたが、キーチには困難に満ちた将来が待ち受けていた。1664年に執筆活動を開始すると、まもなく彼の書物は大変注目を浴びた。くわえて、宗教的迫害を受けるようになったのも、この頃である。たとえば、非国教徒の集会を弾圧するためにバッキンガムシャに送

り込まれた軍隊が、キーチが説教をしている場を発見して、彼を捕えた。そのときには兵士が乗る馬であやうく踏み殺されそうになった。キーチは身柄を拘束され、エイルズベリー牢獄へ連れて行かれ、解放されるまでの間、大変な仕打ちと困難に遭った。その後まもなくキーチは出版物のために大変な経験をする。キーチは子ども向けの教本(*The Child’s Instructor*)を出版したが、この本の中には、英国国教会の教義や式典と明らかに矛盾するものが含まれていた。具体的には、幼児洗礼に関する批判的意見もその本の中で展開されていた。この書物が出版されるや否や、キーチは巡回裁判にかけられることとなり、書物は没収され、罰金を科せられた。1664年10月のエイルズベリー巡回裁判において、裁判長ロバート・ハイドはキーチに起訴文を読み上げた。内容は、キーチが扇動的で異端的分離主義者であり、有害な書物を出版したことを批判するものであった。裁判は恣意的に行われ、評決はこじつけられた。裁判官はキーチに次のような裁きをくださった。

ベンジャミン・キーチ、汝は扇動的で恥ずべき書物を執筆し、出版した。これに対する裁判所の判断は次のようなものだ。保釈を認めず2週間投獄する。その次の土曜にエイルズベリーで2時間さらし台に立つこと。午前11時から午後1時までの間とする。その際、「*The Child’s Instructor, or a New and Easy Primer*」という分離主義的書物を書き、印刷し、出版した」と記された紙を首から下げる。さらに木曜日にはウインズロウのマーケットで同じ時間に同じことをするように。そこで汝の本は絞首刑執行人に汝の目の前で焚書される。そうして汝とその教義は辱められる。国王に対しては20ポンドの罰金を取られ、つぎの巡回裁判で善行と出廷が認められ保証人があるまで収監される。そこで教義を捨て、命ぜられるように公的な服従をすること。⁹⁾

キーチは、自分が書いた本の真実を否定する

気はないと言ったが、裁判官は目もくれずにさっさと看守にキーチを連れて行かせた。キーチは判決通り土曜日にエイルズベリーでさらし台に付けられた。さらし台に頭と手が固定された姿で、キーチは自分が恥じていないということを見物人に告げる。それは、イエスが人間のために十字架にかけられたことを恥じなかったのと同じだとしたのである。そのイエスのために自分は真実を書き、それを発表した。それゆえに、さらしものになることも恥ずべきことではないと言いつつ放った。

次の木曜日、キーチは故郷ウインズロウの町角に立たされた。判決通り、問題とされた著書は、キーチの目の前で焚書された。焚書されたこの本『子どもの教本』は、匿名で出されたものである。ただの学習書ではなく、キーチが問題視していた幼児洗礼を批判し、俗人による説教を擁護し、千年王国主義的心情を明らかに表現するものであった。したがって上記のように彼は逮捕、起訴され、巡回裁判で有罪になり、2週間収監され、町辻でさらしものにされた。しかしキーチはこの機会を使って、支持者への説教を行った。『子どもの教本』は、1500部印刷されていたものがもはや一冊たりとも現存していない。キーチはその後4年間故郷にとどまり、機会をみつけては説教をしたが、常に告発者から追い回され仕打ちを受けた。もはやウインズロウで安住することはできないと考え、1668年、妻と3人の子を従えて、ロンドンに移住することとなったが、途中追いはぎに遭い、一文無しでロンドンに到着した。(のちに裁判で失ったものを取り返している。)

1668年にロンドンに居を構えたあと、キーチは叙任されてサザークのジェネラル・バプテスト教会の役員となった。集会は民家において行ったにもかかわらず、このグループにおいてもまた教区や国の当局に告発された。この間、キーチはカルヴァン主義に傾倒したが、それは当時の有力なバプテストの牧師、ウィリアム・キフィンやハンサード・ノリズとの交流に起因するものだった。

1670年に愛する妻を失い、72年、キーチはカルヴァン主義者を宣言した。さらには、パティキュ

ラー・バプテスト教会をサザークのホースリーダウンに創設した。その年の寛容令によって、集会所を建築することもでき、その後10年で会衆も増加することとなった。このころキーチは『子どもの教本』を、記憶をたどって再現・出版し、20ポンドの罰金を科せられた。その本はのちに米国ペンシルバニアで長く出版された。

パティキュラー・バプテストの牧師としてのキーチのその後のキャリアは論争的で影響力があり、きわめて活発であった。30年にわたり、あらゆる宗派の論敵と口頭あるいは印刷物による議論を交わした。1670年代中期にはクエイカー主義を攻撃する文書を出版し、幼児洗礼の支持者を相手に幅広く論争を続けた。74年に短い論争書(現存していない)を出版しているが、それはリチャード・バクスターの幼児洗礼に関する論考に反対するものだった。バクスターは印刷物で翌年それに反論した。キーチは亡くなる一年前も幼児洗礼についての文書を出版していた。

キーチはバプテスト教会の内部でも熱心に行われていた論争に加わっていた。代表的なものは讃美歌に関してである。1670年代後期になるとキーチは讃美歌を聖餐式の後に用いていた。その後20年間、ホースリーダウンの教会では、まず感謝祭に、のちに日曜の礼拝の際に讃美歌が取り入れられた。キーチが率先して行ったことで、会衆の内外からの反対もおさまっていたのだが、1691年、教会内の反対勢力がトゥーリー通りに別のグループを構成した。キーチはバプテスト教会の指導者のために、讃美歌導入の実践を擁護する文書を示す必要があった。バプテスト教会で讃美歌を推進した最初の人物ではなかったが、そのころまでに有名になっていたキーチには、十分な影響力があったのである。つぎに論争の中心となったのは、少数の会衆に普及していた安息日についてである。この騒ぎはキーチの印刷物“*Jewish Sabbath Abrogated*”によって鎮められた。

1688年から89年にかけて、キーチは*Distressed Sion Relieved*と*Antichrist Stored*という重要な2作を出版した。明らかにホイッグ党的な思想を宣言するものだった。1688年に論争を引き起こし

た論文で聖職者への給与支払いを擁護し、翌年にはパティキュラー・バプテスト教会の委員・牧師の集会の議長のひとりとなった。キーチが推薦する有給の聖職者の職を集会が承認し、キーチをイーストアングリアへ伝道に行かせた。キーチはサフォークのラヴェンダムに教会を創設し、地域の牧師と印刷物での論争を始め、南東ロンドンとエセックスで集会場の建設を引き受けた。

論争的な著述に加えて、キーチは教育的あるいは想像的な書物、すなわちアレゴリー (*War with the Devil*) から擬叙事詩 (*The Glorious Lover*) まで幅広いジャンルの作品を執筆した。1680年代からはホースリーダウンの自宅で印刷所・書籍販売を始めている。1682年には聖書のメタファーの読み方について書き、代表作と言われる *Tropologia* の一部として発表している。晩年になっても積極的に執筆を継続して行い、説教集 *Golden Mine Opened* を1694年に出版、*Gospel Mysteries Unveil'd* はフォリオ判で1701年に発表した。亡くなる1704年までキーチは宗教的活動を続けた。様々な論争を先導し、多数の著書および讃美歌を書いたキーチは、英国のみならず、米国を含めたバプテスト教会において、没後もなお多大なる影響力を持った。

2. ベンジャミン・キーチによる出版物と当時のプリントカルチャー

キーチの著作には現存しないものがあることや、オーサーシップが未確認であるものもあって、すべてを正確に把握するのは現段階では困難である。ここでは、主に Walker によるビブリオグラフィを参考として、キーチによる出版物を検証していきたい。¹⁰⁾

他の非国教徒作家と比較して、キーチの作品は非常に多様であると言えることができる。散文では論争的な作品がある一方で、神へのシンプルな信仰心を描いた詩(賛美歌)も人気を博した。子どもや若者のための教育的な著作も目立つ。

初めて出版したとされる作品 (*The Child's Instructor*) は、子供向けの宗教的手引書といった類のものであるが、既述したように1664年当時の

英国においてこの書物は扇動的で危険であるとみなされ、焚書されたのであった。これは匿名で出版されているのだが、焚書されたのちにキーチは同様の内容の書物を、記憶を頼りに執筆し、さらに著者として自身の名を明示して出版している。つづいて1666年、キーチは *Sion in Distress* という詩を発表した。これも現存していないが、のちに同じものが出版される。

キーチは1668年にロンドンへと居を移しているが、その後まもなく1670年に妻が亡くなった。その年、亡くなった妻のことを歌ったブロードサイドバラッド “A pillar set up, to keep in remembrance his most dear and well-beloved wife, Janne Keach, who fell asleep in the Lord, October the 7th, 1670. in the 31. year of her age” を出版している。ブロードサイドとは、王政復古期に特に多く出回った大判1枚刷りの印刷物を指す。1664年には匿名で出版を行っていたキーチであるが、ESTCで確認することができる最も古い作品は、1670年のこの作品となっている。また、その同年には *Zion in Distress* が出版された。これは *Sion in Distress* というタイトルでも発行されており、上記1666年の *Sion in Distress* と同じ作品である。1673年にはダイアログ形式の詩 *War with the Devil* が発表された。大変な人気を博し、出版から10年の間に7刷を重ねた。翌1674年には *Light from the Son of Righteousness*、*Mr. Baxter's Arguments for Believers Baptism* が出されているが共に現存していない。このように、ロンドンに転居した後のキーチは順調に執筆活動を行い、しかも多くの読者を得ていたことがわかる。

つづく1675年、*Darkness Vanquished* が出版され、この書物は拡大され1698年に新たなタイトルで発表された。同年、*The Grand Imposter Discovered* というダイアログ形式の詩も出版された。1676年、散文作品 *A Summons to the Grave* は説教の形で発表された。同年、出版された “An elegy on the Death of that most Laborious and Painful Minister of God Mr John Norcot” は、亡くなった清教徒の政治家 John Northcote (Norcot) の死を悼むものである。ちなみに、ジョン・パニ

ヤンが『天路歷程』第一部を出版したのは1678年のことである。

1679年に出版された詩 *The Glorious Lover* はキーチの代表作のひとつである。数回の版を重ねた。1681年には再び *Sion in Distress* が出されているが、これは1666年に出版した同名の詩を発展させた作品とみなすことができる。1690年までの間に数回のリプリントが出された、人気作品のひとつである。1681年にはもう一つの代表作、*Tropologia* も出版された。これは Thomas Delaune との共著であり、第一部が Delaune、それ以外はキーチによる。旧約聖書と新約聖書におけるメタファーやアレゴリーを解説している。18世紀後半にもリプリント版が出されている。

1683年、*The Travels of True Godliness* が出版された。これはバニヤンの『天路歷程』と同じようにアレゴリーの形で書かれている。いわばベストセラーとなり、ESTCによれば、18世紀末までに第9版が出されている。出版の記録から、米国でも人気を博していたことがうかがえる。¹¹⁾ *The Travels of True Godliness* 出版の翌年には姉妹作品とも言える *The Progress of Sin: Or, the Travels of Ungodliness* が発表された。*True Godliness* ほど成功はしなかったが、それでも19世紀に至るまで版を重ねた作品である。

1685年、*The Victorious Christian* が出版されたがこれは現存していない。1689年、*Antichrist Stormed* が出されている。同年の *Distressed Sion Relieved* は *Sion in Distress* の続編である。つづいて、*Gold Refin'd*、*The Gospel Minister's Maintenance Vindicated*、*To their Most Excellent Majesties William and Mary...* などが出された。

1691年、*The Counterfeit Christian* においては幼児洗礼反対についての意見を述べた。*The Breach Repaired in God's Worship* においては讃美歌の重要性を語り、教会への導入について議論を展開させた。つづいて出版された *A Sober Reply to Mr Robert's Steed's Epistle concerning Singing*、*An Answer to Mr Marlow's Appendix* も同じ目的で書かれたものである。キーチと他の宗教家による意見交換はさらに続いた模様であるが、キーチはいよいよ

Spiritual Melody というタイトルで300編もの讃美歌を収めた印刷物を1691年に出版している。

1692年にも複数の出版物があるが、幼児洗礼の否定、讃美歌の評価・教会への導入について考えを述べたものが目立つ。

1693年出版の *The Ax Laid to the Root* においてもキーチは幼児洗礼への疑問を呈し続け、同年の *The Everlasting Covenant* はバプテスト教徒の友人 Henry Forty の葬儀におけるキーチの説教である。

1694年には再洗礼派に対する論争書を記したほか、40点もの説教を含む *A Golden Mine Opened* を出版している。さらに *A Trumpet Blown in Sion* が出されているが、こちらも説教である。説教が印刷物として発行される背景には、バプテスト教徒の増加があることは言うまでもない。

1696年には *The Banqueting-House* (1692) の増補版、*A Feast of Fat Things Full of Marrow* が出版された。百編以上の讃美歌が収められている。*God acknowledged* は箴言第3章第6節に関する説教である。*Light broke forth in Wales, expelling darkness* は幼児洗礼を否定する論争書で、のちにウェールズ語版も出版されている。

1697年の出版物はいずれも散文作品で、*A Just Vindication of Mr William Collins, and of Several Other Elders and Ministers* は教会における讃美歌の是非に関するものである。その他には幼児洗礼に関するものも含まれる。

その後1704年まで執筆活動を続けたが、散文は幼児洗礼、按手に関する論争書が主であり、韻文は讃美歌集となっている。1701年に出版された *Gospel Mysteries Unveil'd* は、キーチの書物の中では珍しくフォリオ判である。聖書の寓話に解説を行ったものである。キーチはこの年に没しているが、出版の状況からは、亡くなる直前まで執筆を行っていたことがうかがえる。これほど多数の著作を世に出した作家は当時まれであるが、作品が次々と出版され、ものによっては数度の版を重ねたことから、バプテスト教会の繁栄が示唆されるほか、時代の宗教的論争の過熱ぶりを証明するとみなすこともできる。

作家としてのキーチは王政復古期の清教徒作

家であるジョン・ミルトン、ジョン・バニヤンに大きな影響を受けていたことが考えられる。個々の作品からはバニヤンの愛読書であったアーサー・デント (Arthur Dent, 1552/53-1603) の『凡夫の天国への道』(*The Plain Man's Pathway to Heaven*, 1601) との類似点も見出すことができる。バニヤンの『天路歷程』は1678年に出版されるや多くの読者を得た。当時は『天路歷程』にインスピレーションを受けたように、似た形の宗教的アレゴリーが複数の著者によって発表された。とは言え、さかのぼれば『天路歷程』出版以前の宗教的寓話も存在する。中世のアレゴリーは別として、エリザベス朝あたりから、教会の違いを超えて類似した寓意物語が書かれている。年代が近いところで例を挙げれば、英国国教会司祭であるサイモン・パトリック (Simon Patrick, 1626-1707) の『巡礼者の寓話』(*The Parable of the Pilgrim*, 1664) も、若者が信仰の旅をするという設定のアレゴリーで、大変な人気を博して20年間ほど版を重ね、1687年には第6版を数えた。

同じ清教徒作家であるとは言え、ミルトンの作品の格調の高さ、洗練をキーチに求めることは当然できない。十分な教育をうけたとは言えないキーチは、洗練さを欠いてはいるものの、素朴な言葉で信仰を語り、多くの信徒に共通する身近な経験を描いたのである。むしろバニヤンと共通している。バニヤンとの比較も含めて、キーチの個別作品について次のセクションで考察を行う。

3. *The Travels of True Godliness* の位置づけ

キーチの多くの作品の中から、ここで注目するのは、膨大な部数を売り上げたと考えられている散文作品の *Travels of True Godliness* (仮に『真の敬神の旅』と訳し、これ以降『旅』と省略して示す) である。物語の中心的キャラクターが “True Godliness” (敬神) という名を与えられている。バニヤンの天路歷程と同様、アレゴリーの形で書かれている。初版は1683年に世に出された。出版者はロンドンの書籍商ジョン・ダントンである。ダントンは長老派を中心とする宗教書を多く出版

していたが、キーチの作品も複数扱った。ダントンは『旅』を1万部発行しており、『旅』は必ずや読み継がれていく作品だとみなしている。¹²⁾ たしかに『旅』は1684年には第5版が出されていて、その際には木版画が5点追加挿入され、話に新たなエピソードも追加されている。初版から1, 2年で数回の版を重ね、しかも増補が行われるという、極めてスピーディーな展開には、この作品の人気の高さが特別なものであったことがうかがえる。また、この作品は18世紀に入ってから別の書籍商によって出版が続けられた。初版からしばらくはロンドンで出版されていたものが、18世紀中期以降はおもに米国内で出版されていることから、この作品はアメリカのバプテストによって読み継がれていったことが推測される。読者層は明らかに限定されているとは言え、出版後3世紀以上が経過してなお、ほんの数年前にも米国でペーパーバック版が発売されたことから、信仰者の心のよりどころとなる普遍性を持つ作品であると判断することができる。

『旅』はごく普通の市民に受け入れやすいシンプルな文体・内容で書かれたアレゴリーである。キーチ自身が十分な学校教育を受けたとは言えないので、自身の経験の中から身に付けたシンプルな文体で作品を書いたのは当然のことでもある。『旅』出版の1年後には続編的なアレゴリー、*Travels of Ungodliness* (『不敬神の旅』) が出版されていることから、作品は当時かなり人気を博し、関心を持たれていたと考えられる。読者層はパティキュラー・バプテストに限らず、プロテスタント系キリスト教徒に幅が広がっていた。¹³⁾ この作品は、キーチによる他のいくつかの作品と同様に、おもに若い信者を対象に、クリスチャンとしての生き方の指針を伝えるという役割を果たしている。困難、苦境につぎつぎと直面するキリスト教徒の運命を綴り、様々な世俗的誘惑に打ち勝つことのできない人間の弱さ愚かさを描いている。バニヤンの『天路歷程』ほどではないとしても、当時の廉価な宗教的ポピュラープリントとしてキーチの『旅』は成功を収めていた。人気の理由は価格と内容、英語の簡潔さなどがまず挙げら

れよう。多くが小型のドゥオデシモ判で発行されていて、人々が気軽に手に取って読むことができるものであった。ドゥオデシモは宗教書や女性・子供向けの簡単な読み物に多く採用されていた。ただし、現代まで読み継がれることのなかった原因は何であろうか。ひとつの答えとして言えることは、キーチのアレゴリーの登場人物にはバニヤンが描いたものと比べればリアリティーがあまり感じられず、まさに抽象概念の枠の中に納まっている印象を与えるためではないだろうか。主人公を比較すれば最もそれは明らかであり、バニヤンが描く主人公の Christian (基督者) は、冒頭でぼろの服をまとい重荷を背負って本を片手に嘆き苦しむ場面から、天上の都に達するまで、心情のみならずそのいでたちまでも読者にとって容易に想像することが可能である。より身近な存在として感情移入できると言えよう。

キーチとバニヤンの共通点・相違点を考えてみると、どちらもいくつかすぐに思い浮かべることができる。共通するものとして、まず登場する人物／キャラクターの名前が挙げられる。抽象概念の擬人化を使ったアレゴリーであることとキリスト教の教えを表すため、同じ概念を用いるのは避けられない部分もあると思われる。とくにキリスト教での悪徳を表すキャラクターが多く、たとえば共通するものとして、Ignorance (無知者)、Worldly Wisdom/Wiseman (世俗賢者)、Hate-Good (憎善者)、Fearful (恐怖者) などが目につく。主人公が Apollyon (破壊者) から攻撃を受ける場面もある。『天路歷程』と『旅』の出版年は近く、どちらが先に書かれ、後に書いたほうがその強い影響を受けた、と考えるのは難しい。実際には、これらの共通する名前は先立って出版された別のアレゴリーに登場しているものである。¹⁴⁾ 重要な相違点を挙げると、『天路歷程』は、主人公が天の都を目指す旅を扱い、その道中で遭遇する困難や危険を描く。主人公個人の経験・心の葛藤が具体的に描写される。一方で、キーチのアレゴリーにおいては、主人公の真の敬神者が様々な家を訪ね、ドアをノックして回る。キーチは、主人公に人間の欠点を象徴する人物の家を順

に訪問させながら、キリストの教えを多くの市民に伝えようとしているのである。そこでは、主人公の個人的な感情が詳述されることはなく、むしろ淡々とした言葉のやり取りがダイアログ形式で綴られる。『天路歷程』がひとりの信仰者の魂の遍歴を描いた、すなわち読者が主人公に自分をあてはめて考えることができる作品だとしたら、『旅』は読者が主人公に自分を重ね合わせることはできない。敬神者は神の教えそのものだからである。むしろ、読者が自己投影をするのは物語の中で敬神者が訪ねて回る相手のほうである。彼らは人間の弱さ、愚かさの象徴である。『旅』が17世紀末の英国で大変多くの読者から支持を得た作品であるのは、この物語が、貧しい者、富める者、若者、そして老人など、様々な人間の心の内にある欲望や葛藤を描き出したからではないだろうか。キーチは、神による救済を妨げるものが、無知や傲慢といった人間の普遍的な欠点であることを繰り返し述べている。

『旅』は14章から構成されていて、初めの3章までは敬神者の本質、敬神者の歩んできた道のり、敬神者の敵が説明されている。敬神者が旅をするのは第4章からである。敬神者は神の命を受けて、地球上のあらゆる人、財力、年齢、身分、男女の区別なくあらゆる人のもとを訪問することとなる。そしてまず訪れたのが Riches (富裕者) の家である。敬神者が扉をたたくが、富裕者は多忙であり、それに応じようとはしない。敬神者は家の外で待たされ続ける。家に入ろうとすれば召使に制止されてしまうのである。しばらくして富裕者は病を患う。そしてようやく敬神者を迎え入れようとするのだが、すると召使たちの反発が始まる。召使の名前は悪徳を表す Presumption, Pride, Unbelief, Ignorance, Malice, Vain-hope, Covetousness (傲慢、高慢、不信心、無知、悪意、空頼み、強欲) である。中でも強欲という名の召使が積極的に意見を述べ、富裕者を説き伏せて敬神者を受け入れないようにさせてしまう。つづく第5章で敬神者が訪問するのは Poverty (貧困者) の家である。貧困者は日々の生活に困窮し、敬神者を受け入れる心の余裕はない。それに加え

て、貧困者の周囲には悪い友人たち、Unbelief, Ignorance, Idleness, Wasteful, Fear-Man (不信心、無知、怠惰、浪費、怖れ) がいる。子どもたちは Light-Fingers, Faint-Heart, Carping-Care (悪い手癖、弱い心、うるさいお節介) と名付けられている。これらの者たちの影響により、貧困者は敬神者を歓迎しない。富裕者と貧困者には共通した問題がある。それは Consideration (熟考) の欠如である。良きアドバイスをする友人がいないということである。

第6章で敬神者が訪問するのは Youth (若者) である。若者はその若さゆえに敬神者を受け入れようとせず、Pride, Wanton, Vain-Glory, Love-Lust, Ambition, Gay-Clothes, Hate-Good, Scoffer (高慢、放蕩、慢心、愛欲、野望、虚栄、憎善、冷笑) といった友人と時を過ごすことを優先している。若者は、年を取ったら敬神者を迎え入れるつもりだとするが、敬神者は若者に対して「あなたの若い日にあなたの主をおぼえよ」という言葉を投げかける。そのうちに若者は腹を立て敬神者を追い払ってしまう。第7章では敬神者が Old Age (老人) を訪ねる。家に迎え入れるように依頼する敬神者に対して、老人は体の節々が痛み、弱っていることを理由に、客人を迎えることはできないと断る。第6章で出会った若者と同じように、その老人もかつて若かりし頃、敬神者の訪問を拒否していた。しかし今は明日の命もわからない状態であるから、これ以上敬神者を受け入れるのを先延ばしにする理由はない。しかし老人の家には Weary-Limbs, Dim-Eyes, Peevish, Hard-Heart, Impenitency, Self-Conceit, Enmity, Unbelief, Ignorance (疲れた手足、かすんだ目、怒りっぽさ、かたくなな心、頑固、うぬぼれ、悪意、不信心、無知) などといった名前の召使や子どもたちが住んでおり、年を取ってもなお敬神者の求めには応じないのである。

最終的に敬神者を受け入れる者が現れる。彼は Thoughtful (思慮者) という名前である。かつては Prodigal (放蕩者) として知られていたが、現在では心を入れ替えている。悪い仲間も近くにいるが、他の者たちと異なるのは、思慮者に

は Consideration (熟考者) という味方がついてのことである。思慮者はあらゆる誘惑や攻撃に遭いながらも、それらを克服して、Contentment (幸福) を友として迎え入れる。これによって、聖書の “true godliness with contentment is itself great wealth” 「満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道」(テモテ6章6節) が物語の最後に現実のものとなる。

敬神者が訪ね歩いたのは個人の「家」というよりもむしろ「心」であった。敬神者が心の扉を叩いたときに、人間が心を開いて彼すなわち神を迎え入れるということが、いかに難しいか、その難しさがなぜ生まれるのかということを経験するのはこのアレゴリー『旅』において描いている。

キーチの英語はバニヤンと同じく平易な表現で、語彙も限定されている。キーチもバニヤンも学校教育は十分に受けておらず、むしろ聖書から英語を学んだ点が共通している。そのため、『旅』には、『天路歷程』とよく似た形の文章が目につく。たとえば第9章の冒頭の文は、“As Godliness passed on from the house of this self-righteous professor, he was accosted by a haughty looking person, who seemed greatly disposed to dispute upon religion.” というものであり、バニヤンの英語と似た響きを持つ。また、第10章は “Godliness being informed that there was another professor of religion living in this village; he thought it was convenient for him to see whether he might not get a lodging in his house.” で始まり、こちらも『天路歷程』と類似した印象を与える。『旅』が幅広い読者層に受け入れられる要素のひとつが、この種の英語、すなわち聖書を繰り返し読むことによって身に付けたものと考えられる英語で書かれていたためであったと推測できる。ミルトンやマーヴェルの作品とは異なる、素朴な語彙と表現によって、万人に受け入れられやすい作品が形成されたのである。

むすび

17世紀後半に非国教徒が築き続けた文化は再評価されるべきではないか。英文学史においては、

王政復古以降は主に新古典主義が脚光を浴びる。冷静で理性的な風刺詩がサミュエル・バトラーやジョン・ドライデンによって発表され、浸透していった。同時に、王政復古によって英国の文化は華やかさを取り戻した。劇場の復活は紳士淑女に社交の場を提供し、風習喜劇などの洗練された作品が好まれるようになった。これらは旧体制復権の賜物である。17世紀王政後半の非国教徒作家として現在も名前の残る作家は主にミルトンとバニヤンである。それ以外の作家群についてはその存在さえも見過ごされてきた。ただし、本論考で取り上げてきた通り、たとえばキーチはこのように多くの作品を書き、出版し、一般市民に受け入れられてきた。そして、非国教徒が担った歴史文化形成の一端は、彼らの印刷物・作品に凝縮されて見て取ることができる。キーチに限らず、その他の非国教徒作家も含めて、17世紀という時代の思潮を反映し、文化の形成に寄与した作家群として、彼らは英文学研究において正当な評価が行われるべきである。

注

- 1) John Dunton, *Life and Errors of John Dunton*, 1818, p.177.
- 2) ワイルドをはじめとする非国教徒詩人群は、18世紀初めまで一世を風靡していたにもかかわらず、その後はほとんどがすっかり忘れ去られてしまった。17世紀非国教徒詩に目を向けるきっかけとなるアンソロジー3巻本 (*English Nonconformist Poetry, 1660-1700*, ed. George Southcombe) が発刊されたのは2012年のことである。したがって、文学史上あるいは歴史上の再評価の土台が築かれたばかりである。編者のジョージ・サウスコムは、ワイルドを含む非国教徒詩人の著作から重要な作品を選び、詳細な注釈を付した。このアンソロジーによって、王政復古期非国教徒文学に関心が向けられる可能性が世界的に広まったのである。とは言え、現時点では世界的にも体系的な研究は未だなされておらず、確立された成果の発表が待たれている。
- 3) Joad Raymond, *Pamphlets and Pamphleteering* (Cambridge UP, 2006), p.89. ここでは、イングランドにおける識字率について、1700年までに男性は50%、女性は30%になっていたとされている。
- 4) Vaghn, James Barry. "Public Worship and Practical Theology in the Work of Benjamin Keach (1640-1704)" Ph.D. diss., University of St. Andrews, May 1989.
- 5) バプテスト教会は、一般的にあるいは大まかなやり方で、アルミニウスの流れを汲む普遍救済主義を支持するジェネラル・バプテストと、ジャン・カルヴァン(カルヴィン)の流れを汲む予定説を支持するパティキュラー・バプテストとに分けることができる。キーチははじめジェネラル・バプテスト教会に入信したが、のちに自身の考えがパティキュラー・バプテストに近いものであることに気づいた。
- 6) キーチの名がついているものの、もとは William Collins がまとめたものと考えられる。
- 7) キーチの伝記情報はほとんど日本語で紹介されていないため、ここである程度詳しく述べることにする。情報は、上記 Vaghn の論文および DNB による。Lynch, Beth. "Keach, Benjamin (1640-1704), Particular Baptist minister." *Oxford Dictionary of National Biography*. 30 Dec. 2017. <http://www.oxforddnb.com/view/10.1093/ref:odnb/9780198614128.001.0001/odnb-9780198614128-e-15202>.
- 8) キーチのミーティングハウスは現在も使われていて、その様子は次のウェブサイトで紹介されている。 <http://www.keachsmeeinghouse.org.uk/>
- 9) "Memoirs of Benjamin Keach," *The Baptist Missionary Magazine*. v.3 1821-1822, p.125. <https://hdl.handle.net/2027/mdp.39015039721777?urlappend=%3Bseq=126>
- 10) Austin Walker, *The Excellent Benjamin Keach*, 2nd edition (Ontario, 2015), pp. 401-415.
- 11) 米国では2005年にもリプリント版が出されている。
- 12) John Dunton, *Life and Errors of John Dunton* (London, 1818) p. 177.
- 13) Walker, p. 163
- 14) Vaghn によると、Richard Bernard による *Isle of Man* (1668) に同じ登場人物の名前があるという。Vaghn, p. 280

謝辞

本研究はJSPS 科研費 16K13202 の助成を受けたものです。